
報告者名	梅屋 潔	被調査者生年	①80才代(男)
調査者名	梅屋 潔	被調査者属性	①早稲谷鹿踊り保存会長
補助調査者	なし		

被調査者(主な聞き書きは話者①から)

*話者② 1941年(男)、早稲谷自治会長

はじめに

調査者の担当地域は気仙沼市鹿折地区であるが、民俗芸能に関する近隣地域との比較の観点から、この度八瀬地区についても調査を行った。なお調査には、山形県立新庄神室産業高等学校の齋藤良治氏が同行した。

八瀬地区

市内の鹿折地区からさらに北部に入った山間地に、八瀬地区はある。北部には岩手県、南部には峠を隔てて鹿折地区があり、近代までは人の行き来の少ない地域であった。当地区には、甘酒地藏尊やそれにより独自の形態を持つ「早稲谷鹿踊り」や戦時中の隣組制度を残すなどの特徴が見られる。早稲谷地区は7つの行政区から成り、「早稲谷鹿踊り」のほか「塚沢神楽」「関根の田植え踊り」「台打ち囃子」などの芸能が伝承されていたが、現在ではあとの2者は後継者が途絶えている。なかでも笛の伝承が途絶えたことが致命的であった。早稲谷地区の村社は山の神であり、地区住民はその氏子となっている。

また、八瀬地区は、山間地に位置するために3月11日の東日本大震災でも直接の被害を受けることがなかった地域でもある。ただし、震災の影響で当地区に避難してくる人がいたなど、間接的な影響を受けた。

早稲谷鹿踊り

市史によると、早稲谷鹿踊りは、仰山流山口派の祖である山口屋敷又助の子、山口喜左衛門が伝えたもので、「文政10年(1827)、その山口喜左衛門から「月立村八瀬」の「林蔵」へ伝承された」(『気仙沼市史』(Ⅶ 民俗・宗教編)1994:184)とある。

この地区へ鹿踊りを伝えたのは喜左衛門であり、その父である又助の墓は存在するが、喜左衛門自身の墓は確認されていない。喜左衛門は、鹿踊りの普及には尽力したが、家業である農業はそれほど熱心ではなかった。後年、喜左衛門は旅に出て、この地を去った。

通常の仰山流獅子踊りとは異なり、正統伝承者としての「庭元」はおらず、早稲谷の鹿踊りは誰か特定個人の庭先に奉納することはない。毎年の甘酒地藏尊祭典日に披露される。また、鹿踊りでは、「踊り連」を組んで3年以内に、供養塔を建てる決まりとなっている。供養塔は、明治16年と大正15年に建てられている。昭和の供養塔は、一度計画が上がったがいまだに建てられていない。

甘酒地藏尊

旧暦の6月24日が甘酒地藏尊の祭典日となる。この日、地藏尊前にて早稲谷鹿踊りが奉納される。また、甘酒が振る舞われる。甘酒地藏尊の由来は、240年ほど遡るといわれる。餓えて死んだ赤子、ひいては水子供養を目的としたもので、かつて貧しい時代には重湯あるいは甘酒を母乳の代わりに飲ませていたことに由来する。振る舞わ



写真1 早稲谷住民の崇敬をあつめる甘酒地藏尊

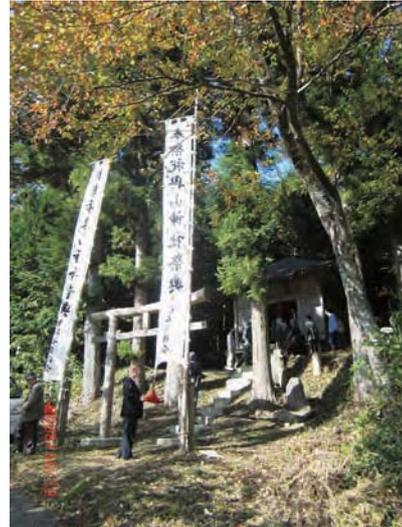


写真2 早稲谷の山の神社（2008年祭典日の様子）

れる甘酒は手作りのものだったが、震災以前に1度だけ、缶の甘酒で代用しないかという動きが起こった。しかし、甘酒だけはここのルーツだから変えてはいけないという意見が出て、代用されることはなかった。

子ども教室による継承

早稲谷鹿踊は、継承者不足から2004年から子ども教室を開催し、従来の早稲谷地区のみの継承から範囲を拡大し月立小学校の学区範囲での継承としている。小学5・6年生を対象に月に1度、伝承館（天井5.5メートル）で子ども教室をおこなっている。文化庁の事業の一環としておこなわれているものである。

子ども教室開催については、2001年ごろから発議され、2003年より集中的な議論が行われ、反対意見が出ていた。明治10年以来、当地区のみで継承され、守り続けられてきたものを、他地区の人間を迎え入れることに対する反対であった。2003年は賛成、反対がわかれたまま、議論は翌年に持ち越しとなったが、2004年になると反対していた人達も賛成に周り、子ども教室が開催されることとなった。

子ども教室開催初年は、子供の数が約30人に及び、保存会で所有していた太鼓の数では間に合わない程になった。そのため、不足分の太鼓についてはダンボールに紐をくりつけ、それを代用品として練習させた。その様子を見たある団体から支援金をいただいたことで、新たに太鼓を増基することができた。なお、太鼓は秋田の曲げわっぱを用いて作られたもので、1張4万円ほどのものである。この後も、支援をいただく度に太鼓を増基している。

鹿踊の地域外進出

震災後の2012年8月23日に、モンゴルのウランバートルにて開かれた「2012 ユネスコ東アジア子ども芸術祭」に早稲谷鹿踊が参加、披露された。月立小学校の児童10人と校長、看護教諭、担任、PTA役員、保存会から世話人2人、計16名でモンゴルに出向いた。また、2013年2月2日には国立劇場小劇場にて日本芸術文化振興会主催の『東北の芸能Ⅱ 宮城』に参加した。その他団体として、石巻市の渡波獅子風流、雄勝法印神楽、仙台市の秋保の田植踊、栗原市の小迫の延年が参加した。

八瀬地区の隣組

八瀬地区には、戦時中からの隣組組織がいまなお残り続ける。早稲谷地区には5組の組織があり、それぞれ1組11戸、2組6戸、3組6戸、4組11戸、5組5戸という構成になっている。組分けは戦時の生活圏によって決められている。そのため、シンルイや親戚関係にあっても異なる組に属することもある。この5つのグループは大正時代から変化していない。これらの組は戦時中（もしくはそれ以前）からの地域毎に作られた単位であり、

基準は一組 5～6 戸である。組を再編する話もあったが、隣組はかつてより冠婚葬祭の一切を共同でおこなうものであったため、今更変更するのは、ということで再編されず現在に至っている。

相互扶助のほかにも、毎年の甘酒地蔵尊の祭礼時の世話役を、隣組で担当する。輪番制で、組内の戸数が多い組は、組を 2 班に分けて 2 年連続で担当する。

村の構成と本家分家関係

早稲谷地区の戸数は 2012 年現在 39 戸（2007 年時での調査では 38 戸）。うち、吉田家 17 戸、菅原家 9 戸、菊地家 4 戸、佐藤家 2 戸、熊谷家 1 戸、高橋家 1 戸の家がある。そのうち、高橋家のみ震災後に新しく増えた家で、そのほかは地区にもとからいる家である。これらの家はたいていが本家から分家したもので、親戚あるいはシブライの関係にあたる。早稲谷地区に一番最初に住みついたのは菊地家とされ、その家は「早稲谷屋敷」と呼ばれたという言い伝えが存在する。地理的な関係から、鹿折、岩手からの縁組が多い。

震災による影響

震災による直接の被害はなかったが、親戚等を頼って八瀬地区に避難してくる人たちがいた。浪板虎舞保存会幹事長の OY 氏も、親戚である SN 氏を頼って早稲谷地区に避難してきた。また、大浦地区から当地区に避難してきた家が 1 戸ある。この家は、もともと早稲谷地区のある家と親戚関係にあったという。

保存会会長の SS 氏は 6 人兄妹で、3 人の妹は海の方、沿岸部へと嫁いだ。この 3 人の家は東日本大震災の津波によって流されてしまったが、人的被害はない。震災後、2 人の妹の家族が会長宅へと避難している。

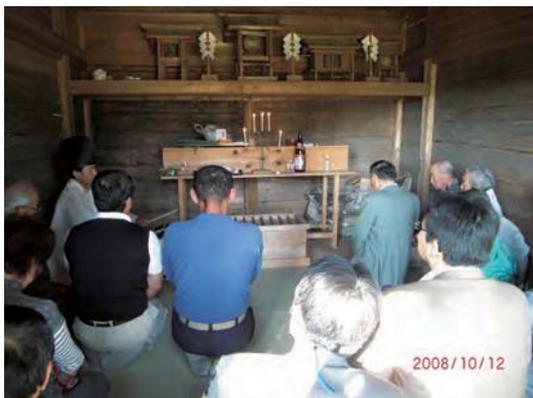


写真 3 山の神神社祭典の様子（2008 年）



写真 4 早稲谷鹿踊り伝承館における山の神神社祭典後の直会（2008 年）